エッセイ　台湾研究を始めるということ

台湾文学研究と資料復刻にかけた 50 年

河原　功

台湾への関心

私が初めて台湾を訪れたのは今から 53 年前、1969 年の春だった。中央研究院民族学研究所の王崧興・吉原弥生夫妻宅にお世話になり、その影響で原住民族（当時は「高山族」「山胞」と称されていた）に興味を持った。

台湾文学に関心を抱くようになったのは帰国後だった。前田愛教授の勧めで「台湾文学」を卒業論文のテーマにすると決めて、その調査のため 1971 年春に第 2 回目の台湾訪問をしたことが台湾文学を本格的に研究するきっかけとなった。台湾大学研究図書館の曹永和館長（後に中央研究院院士）、中央図書館台湾分館（国立台湾図書館の前身）の高而恭氏にはいろいろと便宜を図っていただいた。（3 回目の台湾訪問は 1973 年春、4 回目は 1973 年夏で、この 4 回までの記録は『台湾渡航記－霧社事件調査から台湾文学研究へ』（村里社、2016 年）に纏めた。）

戴國煇氏から受けた論文執筆の心得

1971 年の夏、戴國煇氏から「月刊『アジア』が台湾特集を組むことになったので、霧社事件に関する一文を書くよう、編集者に君を推薦した」旨の話があった。霧社や川中島に足を延ばし、関係者にインタビューし、資料も多く集めていたため、適任者として推薦してくれたのだった。編集者からは 400 字詰め原稿用紙で 22.5 枚と指示された。

原稿は 3 週間ほどかけて書き上げて、アジア経済研究所（市ヶ谷）に持って行った。当時、戴氏はアジ研の主任研究員だった。1 週間後に来るようにと言われた。指定の日時にアジ研を訪ねると、戴氏は、付箋紙をいっぱい貼った私の原稿を一枚一枚めくって、「ここは文意が繋がらない」「裏付けとなる資料を明示すべきだ」「丁寧に論ずべきだ」等々、1 時間以上にわたって、細かに指導してくれた。そして最後に次の言葉を発した。「君の日本語は日本語として熟していない」、と。日本人でしかも日本文学科の学生が、日本語を母国語としない台湾人にそう言われた時のショックは今でも鮮明な記憶として残っている。己の文章力の貧弱さ、研究の浅薄さを恥じた。さらに戴氏は、「金を貰うのだから金になる文章を書け」を付け加えた。

こういう厳しい指導をしてくれる研究者はあまりいない。たいていは「すごいですね」「よくまとまっています」「教えられるところが多いです」と、当たり障りのない誉め言葉が返ってくる。

戴氏からの指導を受けた 1 週間後、私は再度書き直した原稿を戴氏に届けた。返ってきた言葉は「前よりずっと良くなった」の一言だった。戴氏のフィルターを通過した原稿は編集者に渡し、更なるアドバイスを受けて修正を施し、『アジア』第 6 巻第 10 号（1971 年 11 月）に「霧社事件

の語るもの」として掲載された。この「台湾」特集に、戴國煇、尾崎秀樹、坂口樗子、小林文男ら錚々たる人たちに私を組み入れてくれたことはありがたかった。

後に雑誌社から原稿料 22,500 円を頂戴したが、その金額に見合うだけ価値ある内容の原稿を書くことの大切さを戴氏は示してくれたことになる。この二言は、私にとって今でもかけがえのない座右の銘となっている。以来、論文を書く時には戴氏からのアドバイスを意識して書くように努めてきた。

台湾文学研究の始動

さて、前田愛教授に背中を押されて私は台湾文学研究に取り掛かることになったが、予想外の壁が立ち塞がっていた。ある程度は覚悟していたのだが、頼るべき原資料が少ないことだった。台湾文学研究の道のりが遠いことを痛感させられた。

日本国内は当然のこと、台湾でも、台湾文学に関する資料は皆無に近かった。資料収集のため、台湾では毎日のように牯嶺街に行っては、埃まみれ、汗まみれになりながら書籍や雑誌を漁っていた。台中、台南、高雄、嘉義でも古書店や露店を巡った。その後台湾には度々行ったが、毎回、そのような状況を続けていた。しかし、そう簡単に資料は集まらない。

大学院での研究も、台湾文学に決めた。しかし、依然として、指導してくださる先生はおらず、参考文献も皆無に近い状態だった。何よりも困ったことは、読める文学作品として何があるのかわからない、わかっていても所蔵先が見つからない、そもそも台湾についての基礎知識に欠けているので台湾文学の輪郭が掴めない。まさに暗中模索、手探り状態での台湾文学研究のスタートだった。

台湾文学に繋がる人とも会う努力をしたが、時には警戒もされた。でも、幸いなことに平凡社の池田敏雄氏（『民俗台湾』編集者、『台湾の家庭生活』の著者）と懇意にしていたので、台湾省文献委員会編纂組長の王詩琅氏を紹介していただき、お二人の縁で関係者を次々と紹介していただいた。張文環、呉濁流、楊逵、葉栄鐘、廖漢臣、洪炎秋氏などからも、当時の台湾文芸界の話を伺うことができたことはありがたかった。

修士論文では「台湾新文学運動の展開」を書き上げたが、副論文として「佐藤春夫『殖民地の旅』をめぐって」を添えることにした。指導教官の成瀬正勝教授から、教授会審査を通過させるために日本文学に添った論文があると都合がよいとの助言を受けたからだった。あの当時の日本文学科では、台湾文学はまだ認知されていなかったのだ。

苦労して書き上げた私の修論は、日本でも台湾でも、まだ誰も本格的には取り組んで来なかったテーマだった。後に『台湾新文学運動の展開－日本文学との接点』（研文出版、1997 年）として出版、台湾では莫素微訳で出版された。読み返してみると、内容に多少の誤りや言葉足らずのところがあるが、今でも研究者の間で基本文献として頼りにしてくださるのは嬉しい。

その後、日本人作家では中村地平、濱田隼雄、中村古峡、真杉静枝、大鹿卓、伊藤永之介についても論考を発表していった。台湾人作家では、楊逵、呉濁流、呉新栄、王昶雄、江肖梅などについて論じてきた。どれも先行研究と言えるものはほとんどない状態だった。でも、先行研究が

ないということは、ある意味で気が楽だった。

研究を進めていくと、いろいろと面白い発見に出会う。それが新たな研究の種となり、しばらくするといくつかの事実が集まって、枝葉をつけて成長していく。こまめにメモを取っていることが功を奏するのだった。そうして論文としてまとめ上げたのが、日本統治期台湾での演劇運動、台湾での書籍の流通、台湾での検閲の実態、新聞の漢文欄廃止、台北高等学校での文芸活動、敗戦後の邦人の台湾引揚げと留用、引揚げ後の邦人の残置財産問題などで、研究領域が台湾文学の周辺にも広がっていった。その一部は『翻弄された台湾文学運動の展開－検閲と抵抗の系譜』（研文出版、2008 年）として出版、台湾では台湾大学台湾文学研究所の張文薫教授が中心となって中文訳で出版された。

配慮を必要とする資料の扱い

台湾研究の過程で、知り得た情報ではあるが、時には公表を封じる、または遅らせることもあった。

『台湾近現代史研究』創刊号（1978 年 4 月）に「楊逵－その文学的活動」を書いたが、政治犯としての 12 年間の緑島生活、釈放後の生活など、楊逵本人からいくつかの証言を得ていたが、それらの中には公表するに躊躇する内容があった。台湾大学法学院の許介麟教授からその点に関して不満が述べられたが、あの戒厳令当時は公表できる状況下ではなかった。私自身の台湾での行動に支障をきたすのみならず、楊逵家族や関係者に多大な迷惑をかけると思い、年譜の中に織り込まないことにした。

1973 年に佳里の呉新栄宅（新生聯合医院）を訪問した。所蔵する台湾資料を林戴爵と林瑞明の両君とチェックしていると、床下から『台湾文芸』『先発部隊』『文学案内』などとともに、台湾文化協会が東京で発行した『台湾大衆時報』『新台湾大衆時報』（台湾では発禁）が出てきた。呉新栄が左翼に傾倒していたとは台湾では誰も認識していなかったが、私は直感的に彼を左翼作家だと判断した。調べを進めていくと、その事実が徐々に明らかになっていった。しかし、台湾が戒厳令下にある限り、そのラインで呉新栄を論ずるには時期尚早と判断、発表は戒厳令解除（1991 年）の後、状況が落ち着くまで持ち越した。

また、ある台湾人作家から中学校時代の「通信簿」を頂戴していたが、公開は控えた。そして、その「通信簿」は永久に封印することにした。そこには学業成績以外の記録欄があり、本人にとって不利益となる事項が記載されていたので、本人並びに家族の名誉を守るべきだと判断したからだ。

『台湾引揚・留用記録』（ゆまに書房、1997 年）の編集復刻版を出すにあたっても、孤児、精神病患者やハンセン病患者の記述には、当然のこと、人物が特定されないように配慮した。

新事実を世に紹介することも研究上では大切だが、プライバシーを侵すとなれば、それは研究の域を逸脱した行為ではないか。当時はまだ個人情報保護が問題にされていなかったが、それを意識しての配慮は適切な判断だったと思っている。

台湾研究のための環境整備

幾度も繰り返すが、台湾文学研究を続けてきていつも深刻に感じたことは、原資料が読めないということだった。それは私に限ったことではない。むしろ、多くの研究者や学生諸君が直面している問題だった。そこで早い時期から、研究のかたわら、資料の復刻に極力努めることにした。幸いにして入手できた貴重な原資料が少なからず手元にあり、所蔵している個人や機関とのパイプもあり、復刻に協力してくださる研究者仲間もいたため、誰しもが公平に享受できる研究インフラの整備に取り組んできた。

中島利郎氏（岐阜聖徳学園大学）・下村作次郎氏（天理大学）・黄英哲氏（愛知大学）たちと『日本統治期台湾文学　日本人作家作品集』全6巻、『同　台湾人作家作品集』全6巻、『同　文芸評論集』全5巻、『日本統治期台湾文学集成』全30巻を復刻出版した。『日本植民地文学精選集　台湾編』全14巻の復刻出版にあたっては、さらに藤井省三氏（東京大学）・岡林稔氏（宮崎大学）・野間信幸氏（東洋大学）・星名宏修氏（琉球大学）・垂水千恵氏（横浜国立大学）の協力を得た。これによって、台湾文学研究の下地形成を果たすことができた。

また、台湾文学以外にも、私個人として『台湾人士鑑』『台湾大年表』『台湾日誌』『旬刊台新』『台湾出版警察報』『新建設』『号外』『民俗台湾』『風月・風月報・南方・南方詩集』『翔風』『台高』『蕉葉会報』、さらに『台湾引揚・留用記録』『台湾引揚関係資料集』『資料集　終戦直後の台湾』などを復刻した。

『台湾霧社蜂起事件－研究と資料』『台湾霧社事件軍事関係資料』『台湾大衆時報』『台湾六法』『公学校用国語読本』などには資料提供をしてきた。

台湾文学研究の現状

50年前には台湾文学研究そのものは研究対象として認められていなかった。清華大学（新竹）の陳萬益・呂興昌教授によって企画された1994年の清華大学での台湾文学を巡る国際会議、それが大きなきっかけとなって、台湾文学は今では立派な一研究分野となった。日本でも大学での講座が開かれ、研究者も誕生するようになった。台湾では大学院の博士課程にまで育っている。台湾研究、とりわけ台湾文学研究が不毛な時代に、私はそれに取り組んできたわけだが、充実感を覚えるとともに、発表した論文や復刻した数々の資料を通じて研究者に貢献できたことを誇りに思っている。

しかし、研究テーマはたくさんあり、復刻を待たれる資料もたくさんある。したがって、これからも研究に励み、必要とされる資料の復刻に努めていきたい。後継の研究者によって、台湾研究、台湾文学研究が更に進展／深化していくことを願っている。

（2022年2月24日記）